

## ハマグリ資源管理に関する研究と実績

熊本県は、ハマグリ生産量日本一です。とくに緑川・白川河口の個体は殻の模様が美しく、京阪神などに高値で出荷されています。しかし、このことは地元でもあまり知られていません。また、漁獲に関する規制がほとんどなく、多くの漁場でハマグリが乱獲されています。さらに、ブランド化や地産地消など、ハマグリを高く売る努力もほとんど行われていません。

逸見教授が長年東アジアにおけるハマグリ類の分類や生息状況に関する研究を行っていました。3年前から、「熊本県ハマグリ資源管理研究プロジェクト」(代表:内野センター長)を立ち上げ、ハマグリ資源管理とブランド化に関する研究を行っています。

プロジェクトでは、厳密な漁獲管理が行われている加布里湾(福岡県前原市)と管理のほとんど行われていない白川河口(熊本市)で、ハマグリ生息状況と稚貝加入・成長・生残などの生活史、漁獲の影響などを比較しました。その結果、白川河口では大型個体は少ないものの稚貝は豊富に生息すること、殻長で年1~1.5cm程度成長すること、死亡は年間を通して少ないことなどがわかりました。このことは、小型のハマグリ漁獲を規制すれば、大型の個体が増えることを意味します。そこで、研究成果や提言内容を説明する講演会を熊本県や熊本市と共に開催し、採貝サイズ規制を現行の殻長30mmから順次40mmに引き上げること、産卵期である夏場は休漁とすることなどを提言しました。その効果もあり、川口漁協や小島漁協などハマグリ資源管理を行う漁協が増えました。今後、漁獲管理地域でのモニタリング、漁業者・漁協間の合意形成、ブランド化の推進についても研究を進めたいと考えています。

たのに対し、私は、(自分が英語を早口でしゃべれないから、でもあるのですが)情報量を絞ってゆっくりと話したため、発表内容が明確に相手に伝わったためでもあると思われまます。「アナタの講演は素晴らしかった」と言われて、大変うれしく感じました。次の大会では、講演内容そのもので聴衆に絶賛されるよう、さらに研究を続けていきたいと思ひます。

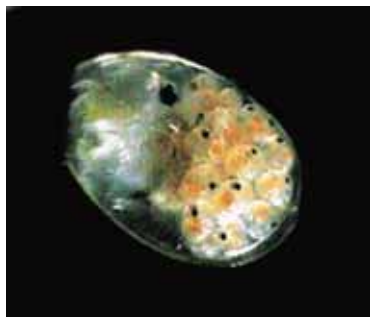
(有明海・八代海の生物一7)

## ウミホタル

ウミホタル(*Vargula hilgendorffii*)は、「蛍」という名前はついていますが、昆虫ではありません。左右二片の無色透明な背甲に包まれた体長約3mmの甲殻類(エビやカニの仲間)です。青い発光液を放出して光るため、海岸では大変目立つ動物です。しかし、完全な夜行性で、ヤコウチュウと間違われることが多いため、あまり知られていません。合津マリンステーションでは、10年ほど前から生態学的研究を続けています。

彼らの繁殖期は3~10月で、メスは背甲内に約50個の卵を産みます。1ヶ月足らずで孵化しますが、子ども(体長約1mm)は親と同じ形です。寿命は、数ヶ月です。寄生性甲殻類のウミホタルガクレが卵を食べることが、繁殖できない主な原因です。捕食者を驚かせて逃げるために発光すると考えられますが、求愛の際にも光るようです。

海岸で光るウミホタルは、まるで夜空で輝く星のようです。上天草市松島町の樋合海岸では、毎年夏休みにセンターと上天草市共催の海蛍観察会が開催されています。一度参加して見ませんか!



抱卵中のウミホタル